

病み上がりかと疑うような痩せぎすの体で、ふわりふわりと高座に上がる。体重は40キロ台を上回ったことがないらしい。白髪混じりの髪、げっそりとほおが痩け、目だけがキラキラ光っている。怪談の登場人物ではない。これが柳家蝠丸の、ごく普通の高座姿なのである。

蝠丸は若い頃から怪談が好きだった。かつて、彼が所属する落語芸術協会に春風亭扇枝（1952～2002年）というベテランがいた。あの桂歌丸が三遊亭圓朝作の怪談噺を手がけるよりずっと以前から圓朝ものに取り組み、毎月、自分の会でネタおろしをしていた。若き日の蝠丸（二ツ目当時は小蝠）はこの会に興味を持ち、扇枝もそんな蝠丸を可愛がった。

蝠丸が真打になるかならないかの頃というから1980年代の後半か、扇枝から「噺を教えてやるから来い」と呼び出された。

「これが、とんでもない稽古なんですよ。『江島屋怪談』と『もう半分』と『一眼国』という、怪談3席ぶっ続け。ありがたいには違いないけど、何がどの噺やら、頭がくらくらしたことだけ覚えています」

それでも真打直後、四谷倶楽部で始めた独演会の記念すべき一回目で『江島屋怪談』をなんとか初演した。だが、寄席で演じるには長すぎるし、年中できるネタでもない。

「教わったものの手をつけられない状態が続きました。これじゃいけないと、『江島屋怪談』を得意にした五代目古今亭今輔師匠の音源を聴いたり、圓朝全集を読んだりして、自分なりにまとめてみたんです」

そんな研究成果が実を結んだのが、2016年から6年続いた浅草演芸ホール「怪談ばなしの会」だ。10日間興行の最初の5日が蝠丸、後半5日は講談の人間国宝・神田松鯉のトリで怪談を演じるという企画である。照明などの効果を駆使し、ユータ（落語家が扮する幽霊）を出すなど工夫を凝らした怪談が好評だったが、2019年にアクシデントがあった。

「怪談の最後、照明を真っ暗にして、早変わり幽霊になった私が『ひひひ』と言いながら舞台袖に引っ込む段取りなんですけど、何を間違ったか、客席の方に後ずさって高座から転落、骨盤骨折という大怪我をしました。本当は即手術なんですけど『あなたは痩せすぎて体力がないからできません』と先生に言われて、結局3か月寄席を休みました」

さて恐ろしき、なんとやら。こんなことがあっても、蝠丸は挫けずに怪談を続けている。

「たいていの怪談ものは後半に幽霊が出る。でも『江島屋』は最初から只事ではない雰囲気、全編、異様なムードが漂っています。私は『牡丹燈籠』のようなきれいな怪談より『江島屋』のようなおどろおどろしいのが大好きで」

やはり怪談は蝠丸のライフワークなのか。

「いやいや、皆さん誤解されてるようですが、私は『怪談しかやらない』ではなく、『怪談もできる噺家』ですから。滑稽噺も好きですよ！」（長井好弘）

☆ 長 井 好 弘(演芸評論家)

1955年8月10日、東京・江東区深川新大橋生まれ

元読売新聞編集委員。都民寄席実行委員長。

浅草芸能大賞専門審査員。

『僕らは寄席で「お言葉」を見つけた』

『新宿末広亭のネタ帳』

『寄席おもしろ帖』

ほか著書・編書多数。

TBSテレビ主催 第五次「落語研究会」プログラムに

2003年3月から「当世噺家気質」を執筆中